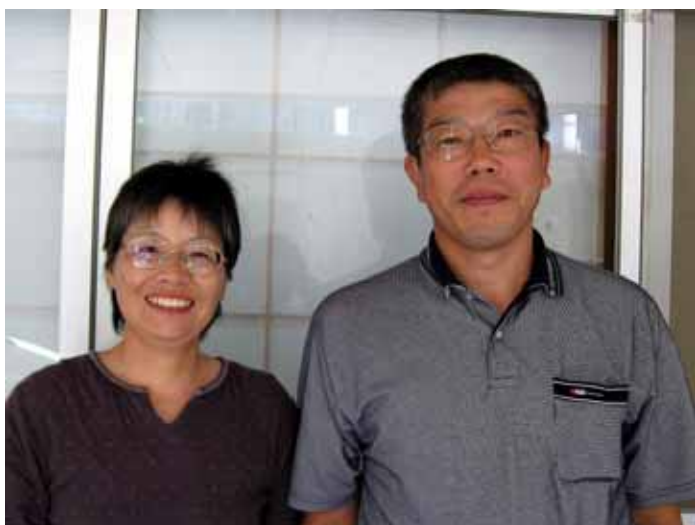


## 家族で行う地域と一体化した SPF 養豚経営



富永 治（とみなが・おさむ）  
富永 悦子（とみなが・えつこ）  
愛媛県喜多郡内子町  
〈認定農業者〉〈家族経営協定締結〉

### 推薦理由

富永さんの経営は、高知県との県境に近い条件不利地にありながら、県下でもトップクラスの技術成績を誇る優良経営体である。1981年に県下でもいち早く SPF 豚を導入して経営を開始し、現在では JA 愛媛たいきにおける中核的な農家になっている。

衛生管理および飼養管理に関しては、基本を重視しつつ、徹底することにより生産技術成績の落ち込みのない良好な経営を維持している。借入金の償還も 10 年前に終了しており、現在は、固定負債のない健全な経営である。

平成 17 年度の主な技術成績は、種雌豚 1 頭当たり年間分娩回数 2.31 回、肉豚出荷頭数 24.2 頭、年間枝肉重量 1,716 kg となっている。これらの高い技術成績が認められ、JA 愛媛県養豚経営者協議会より優秀な生産者に贈られる優秀賞を連続受賞するとともに、特別表彰も授与されている。

販売面については、早い段階から JA 等との連携により地域銘柄豚「新風味豚」の有利販売に取り組み、消費者への PR 活動にも積極的に参加するなど、生産面のみならず、販売面での努力も欠かさない。また、最近では、地元にある県下でも有名な道の駅「内子フレッシュパークからり」に地場産食材として豚肉を提供し、ハム・ソーセージの原料として使用されるほか、レストランの食材で使用されており、地産地消の推進と地域の元気づくりに貢献している。

一方、経営のある内子町は、町独自の計画によりエコロジータウンを目指す取り組みを次々と実践している町である。富永さんをはじめ町内の養豚農家は、発生する家畜排せつ物を町内の共同たい肥センターに原料として供給し、そこで食品残さとともにたい肥化されている。耕種農家は、生産たい肥を用いて作物を栽培し、町から「環境に優しい栽培方法で生産された農産物」としての認証を受け、安全・安心な農作物として道の駅で販売を

行っている。このように農家 - JA - 行政が一体となり資源循環型農業を推進しており、養豚農家も一翼を担っているのである。

富永さんは養豚という産業を通して地域にも積極的に貢献しており、これからの地域の畜産経営を担っていく、優れた経営者であるといえる。

(愛媛県審査委員会委員長 大本 健 路)

## 発表事例の内容

### 1 地域の概況

#### (1) 一般概況

内子町は、県都松山市の南南西約 40km の地点にある。県のほぼ中央に位置し、町の中央部を一級河川・肱川(ひじかわ)の支流である小田川が流れている風光明媚な地域である。平坦地が少なく丘陵地と山地が広がっており、大半が山林となっている。

同町は、江戸後期から明治時代にかけて和紙と木蠟(もくろう)で栄え、製蠟用具が重要有形民俗文化財に指定され、大正時代の歌舞伎劇場「内子座」が修理復元されるなど、当時の面影を残す白壁の町並みは国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されており、歴史的文化活動の拠点として名高い。平成 12 年 7 月に四国縦貫自動車道の伊予～大洲間が開通し内子五十崎 I.C. が建設され、松山から車で 1 時間圏内となり、さらなる産業と観光の発展が期待されている

#### 【内子町の概況】

平成 17 年 1 月 1 日、3 町(旧内子、旧五十崎、旧小田)が合併し、新内子町が誕生

面積 299.50km<sup>2</sup>(東西 30km、南北 27km)

人口 9,651 人(平成 18 年)

世帯数 7,278 世帯(平成 18 年)

#### (2) 農業・畜産の概況

農業については、県内最大の産地である葉タバコをはじめ、ブドウ、柿、梨などの落葉果樹の栽培が盛んに行われており、特にシーズンになると観光(もぎとり)農園が多くみられる。

町内には、平成 8 年にオープンした道の駅「内子フレッシュパークからり」がある。地元農産物直売所、レストラン、加工実習室、情報・研修センター等を兼ね備え、連日賑わいを見せており、人々の交流スポットになっている。愛媛県下の「道の駅」の中でも非常に集客数が多く、平成 16 年度の年間売上高は 6 億円を超えた。

第一次産業の就業者数は 21.5%(平成 18 年)である。年々減少しており、現在の畜産農家戸数は乳用牛 15 戸、肉用牛 5 戸、養豚 5 戸、採卵鶏 1 戸、ブロイラー 1 戸となっている。

#### (3) 経営の所在地

富永さんの経営は、内子町の市街地から国道 379 号線を清流・小田川沿いに東へ 10km の大瀬地区（ノーベル文学賞受賞作家・大江健三郎氏の出身地として有名）の北部に当たる程内地区に位置する。標高 400m前後の山々が連なる地域であり、豚舎も山の頂上付近に位置し、周囲を山林で囲まれている。

## 2 経営・生産活動の内容

### 1) 労働力の構成（平成 18 年 4 月現在）

区分	続柄	年齢	農業従事日数（日）		畜産部門 年間労働時間 （時間）	部門または 作業担当	備考
				うち畜産部門			
家族	本人	52	350	330	4,200	飼養全般、肥育、 分娩、データ管理	経営主
	妻	46	350	330		飼養全般、分娩	
	父	76	100	50		たい肥化処理	
常雇	なし						
臨時雇	なし						

畜産部門年間労働時間については、平成 17 年 1 月～12 月を参考に掲載した。

### 2) 収入等の状況（平成 17 年 1 月～12 月）

部門	種類・品目	飼養頭数	販売・出荷量	販売額・収入額	備考
畜産	肉豚	種雌豚 65.8 頭	肉豚 1,597 頭	52,554 千円	
	その他の豚			794 千円	

### 3) 土地所有と利用状況

区 分	面 積 (m <sup>2</sup> )
養豚用地全体	5,000
うち建物・施設	2,072
うち畜舎	1,258

4) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績 (平成 17 年 1 月 ~ 12 月)

経営の概要	労働力員数 (畜産部門・2000時間換算)		家族	2.1 人		
			雇用	- 人		
	種雌豚平均飼養頭数		65.8 頭			
	肥育豚平均飼養頭数		876 頭			
	年間子豚出荷頭数		- 頭			
	年間肉豚出荷頭数		1,597 頭			
収益性	養豚部門年間総所得		9,679,197 円			
	種雌豚 1 頭当たり年間所得		147,100 円			
	所得率		18.1 %			
	種雌豚 1 頭当たり	部門収入		810,826 円		
		うち肉豚販売収入		798,686 円		
		売上原価		631,624 円		
		うち購入飼料費		387,006 円		
うち労働費		113,982 円				
うち減価償却費		25,716 円				
生産性	繁殖	種雌豚 1 頭当たり年間平均分娩回数		2.31 回		
		種雌豚 1 頭当たり分娩子豚頭数		27.1 頭		
		種雌豚 1 頭当たり子豚離乳頭数		25.8 頭		
	肥育	種雌豚 1 頭当たり年間肉豚出荷頭数		24.2 頭		
		事故率 (離乳 ~ 出荷)		4.0 %		
		肥育開始時 (離乳時)	日齢	21 日		
			体重	6 kg		
		肉豚出荷時	日齢	198 日		
			体重	109 kg		
		平均肥育日数 (離乳 ~ 出荷)		177 日		
		出荷肉豚 1 頭 1 日当たり増体量 (離乳 ~ 出荷)		0.582 kg		
		肥育豚飼料要求率 (離乳 ~ 出荷)		2.67		
		トータル飼料要求率		3.17		
		枝肉重量		70.8 kg		
		販売価格	肉豚 1 頭当たり平均価格		32,908	
			枝肉 1 kg 当たり平均価格		465 円	
枝肉規格「上」以上適合率		62.8 %				
出荷肉豚 1 頭当たり差引生産原価		25,524 円				
種雌豚 1 頭当たり投下労働時間		64 時間				

安全性 - 借入金残高：なし

(2) 技術等の概要

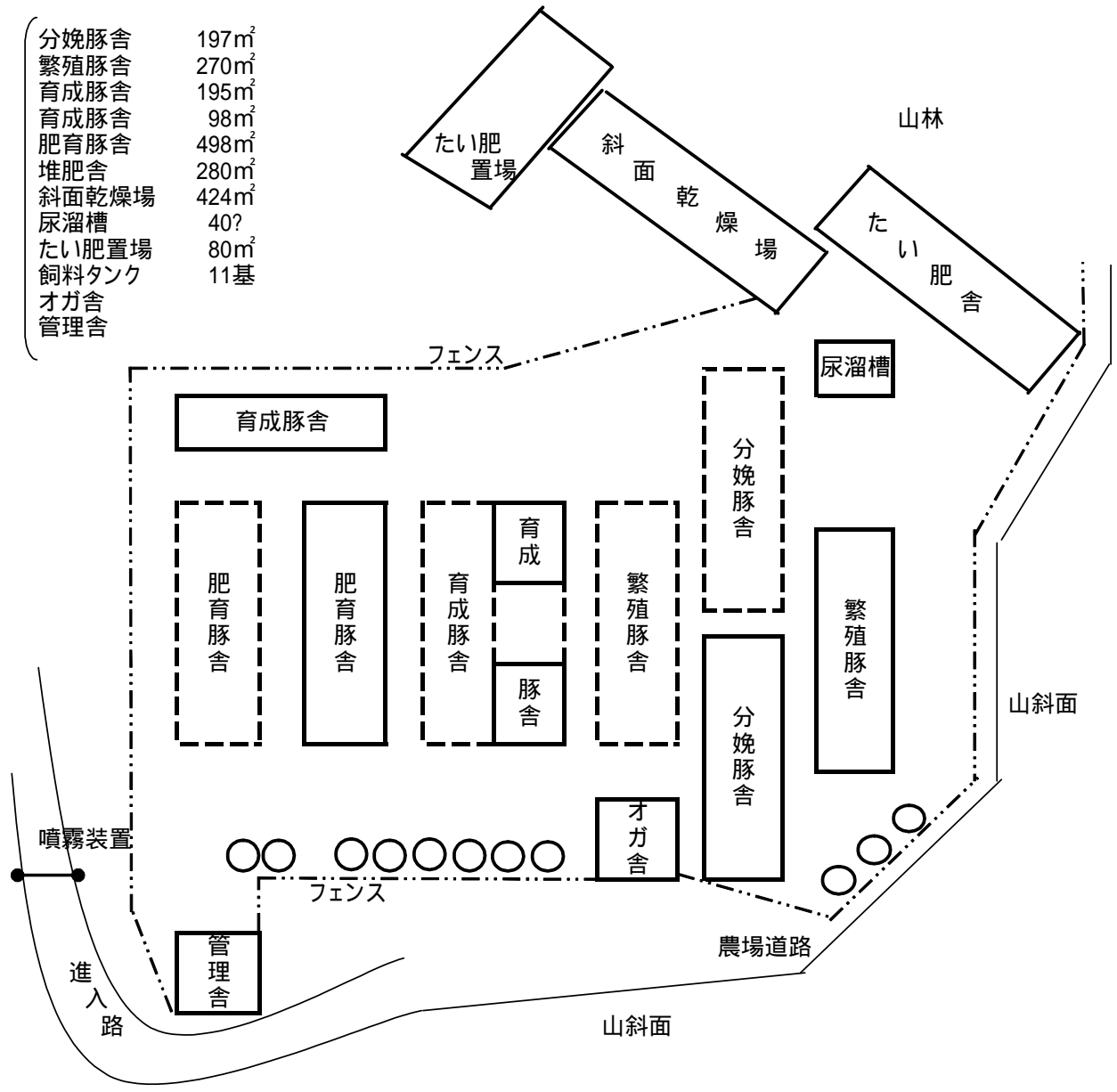
経営類型		一貫経営
地帯区分		山間農業地域
飼養品種		種雌豚：LW 種雄豚：D
後継者の確保状況		地元で他産業に従事
飼養形態	SPF 生産の実施	あり
繁殖形態	繁殖豚の飼養方式	ストール
繁殖	人工授精の有無	なし
飼料	自家配合の実施	なし
	食品副産物の利用	なし
肥育	肥育面積（肥育前期）	1 豚房当たり 5 m <sup>2</sup> 、10 頭飼養
	肥育面積（肥育後期）	1 豚房当たり 7.5m <sup>2</sup> 、12 頭飼養
	加工・販売部門の有無	なし
販売	ブランド肉生産	銘柄豚「新風味豚」生産
	地産地消の取り組み	道の駅「内子フレッシュパークからり」に豚肉を提供
	協業・共同作業の実施	なし
その他	施設・機器等共同利用	建物・施設
	共同たい肥センターの利用	あり（JA 愛媛たいき内子堆肥センター）
生産部門以外の取り組み		なし

5 ) 主な施設・機械の保有状況

種類	名称
畜舎・施設	「豚舎見取り図」のとおり
機械・器具	洗浄器、2t ダンプ、軽トラック、トラック、

# 豚舎見取り図

分娩豚舎	197m <sup>2</sup>
繁殖豚舎	270m <sup>2</sup>
育成豚舎	195m <sup>2</sup>
育成豚舎	98m <sup>2</sup>
肥育豚舎	498m <sup>2</sup>
堆肥舎	280m <sup>2</sup>
斜面乾燥場	424m <sup>2</sup>
尿溜槽	40?
たい肥置場	80m <sup>2</sup>
飼料タンク	11基
オガ舎	
管理舎	



点線の豚舎は山口養豚

## 6) 家畜排せつ物の処理・利用状況

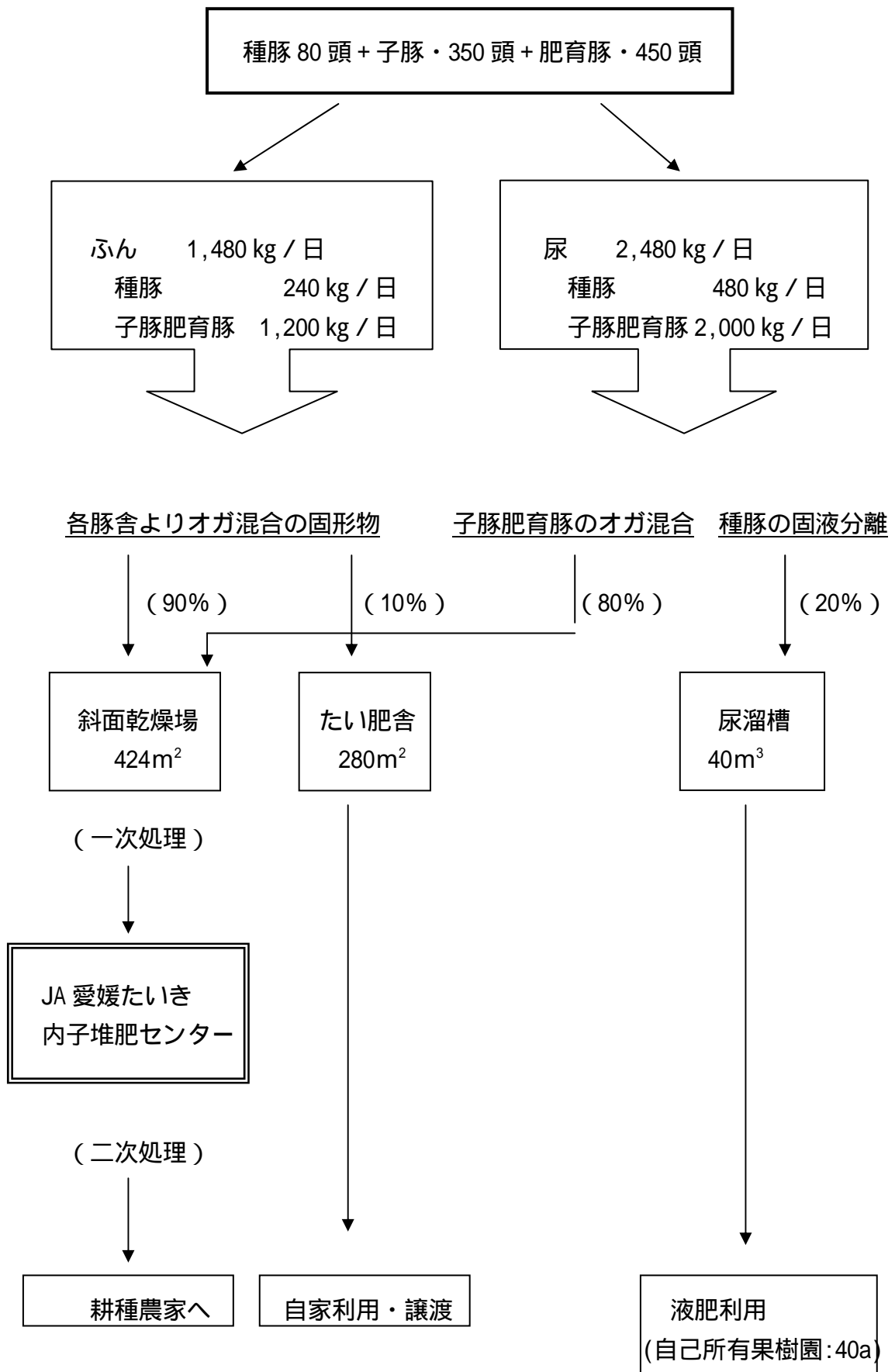
### (1) 処理の内容

処理方式	一部分離 繁殖豚舎、分娩豚舎：ふん尿分離方式 育成豚舎：オガクズ吸着 肥育豚舎：蹴落としによるふん尿混合方式
処理方法	固形分 堆積発酵。共同の斜面乾燥場とたい肥舎を利用。各豚舎から出てきた固形物はボブキャットで地形を利用した斜面乾燥場へ運搬し、一次処理された後、JA 愛媛たいき内子堆肥センターに出荷したい肥化。 現在は育成豚舎において「えひめ AI - 1 菌」を散布しており、豚舎内の消臭効果はもちろん、たい肥の発酵促進にも効果がある。 液分 尿や豚房水洗等による汚水は、共同の尿溜槽に溜まり、曝気による浄化処理の後、自己所有地の果樹園に土地還元している。
敷 料	育成豚舎：オガコ

### (2) 利用の内容

	内容	割合 (%)	用途・利用先等	条件等	備考
固 形 分	たい肥センター	90	JA 愛媛たいき内子堆肥センター (利用料：3万円/月)	センターのダン プが引き取り	オガク ズ混合
	無償譲渡	5	近隣のキュウリ栽培農家	運搬含む	
	自家利用	5			
	計	100			
液 分	土地還元	20	共同の尿溜槽(40m <sup>3</sup> )から、曝 気による浄化処理の後、液肥利 用。		
	その他	80	育成舎はオガクズ吸着し、肥育 舎は蹴落とし方式なのでオガク ズ混合でたい肥処理。たい肥セ ンターに出荷。		
	計	100			

(3) 処理フロー図





### 3 経営の歩み

#### 1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数 (種雌豚)	経営・活動の概要
昭和 54	タバコ + 水稲		・両親とともにタバコと稲作の複合経営(本人 25 歳、既に後継者として就農)
55	〃		・豚舎の敷地造成が始まる
56	養豚 + タバコ + 水稲	150(共同)	・程内養豚団地が形成される(SPF 養豚にいち早く注目した地域の農家で構成)
59	〃	70	・本人 28 百万円を借り入れ、山口氏との共同経営の豚舎の建設を開始
63	養豚 + 水稲 + 果樹 + 畑作	70	・ SPF 豚の育成豚 150 頭を導入し、山富団地(山口氏、富永さんの共同)として養豚経営を開始
平成 2	〃	70	・結婚
3	〃	70	・山富団地としての共同施設を一部残し、経営を分割
4	〃	70	・本人は養豚に従事し、両親が果樹作(ゆず、キウイフルーツ)や畑作(キュウリ)を開始
7	〃	68	・廃材(電柱)利用による子豚育成舎の改築
8	〃	68	・愛媛県経済連(現、全農えひめ)JA とともに銘柄豚「内子風味豚」の契約販売を開始
12	〃	72	・愛媛県総合畜産共進会にて受賞
13	〃	74	・パソコンと養豚診断システム「トントンアップ」を導入し、自ら経営診断を開始
14	〃	70	・ SPF 農場の認定(日本 SPF 豚協会)
15	〃	67	・分娩舎を高床式分娩ストールに改造
16	〃	65	・資金の借入償還が終了
18	〃	65	・子豚舎を高床式育成ゲージに改造
			・「程内養豚団地」(4 戸)として第 10 回愛媛農林水産賞(主催:愛媛新聞社)の優秀賞を受賞
			・地元自治会の事務局長に就任
			・JA 愛媛養豚経営者協議会の優秀会員、優秀賞を受賞
			・JA 愛媛養豚経営者協議会の優秀会員、優秀賞を受賞
			・JA 愛媛養豚経営者協議会の優秀会員、特別表彰を受賞
			・地元自治会の会長に就任
			・今秋、山口氏が離農し、民宿経営を開始

## 2) 過去5年間の生産活動の推移

	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
畜産部門労働力(人)	3	3	3	3	3
種雌豚平均飼養頭数(頭)	73.6	70.2	67.3	65.0	65.8
肥育豚出荷頭数(頭)	1,531	1,401	1,575	1,606	1,594
畜産部門の総売上高(千円)	51,671	47,262	44,808	51,306	53,352
主産物の売上高(千円)	50,893	46,583	44,223	50,668	52,554

## 4 特色ある経営・生産活動の内容

### (1) 安定した技術成績

平成17年の主な技術成績をみると、種雌豚1腹当たり正常産子数11.8頭、離乳頭数11.0頭、種雌豚1頭当たり年間分娩回数2.31回、育成率95.1%、種雌豚1頭当たり肉豚出荷頭数24.2頭、上物率62.8%、平均枝肉重量70.8kg、DG(肥育開始～出荷)548.7g、農場飼料要求率3.17、種雌豚1頭当たり年間枝肉重量1,716kgとなっている。

過去5年間の平均でも、種雌豚1腹当たり正常産子数11.1頭、離乳頭数10.4頭、種雌豚1頭当たり年間分娩回数2.30、育成率93.4%、種雌豚1頭当たり肉豚出荷頭数22.6頭、上物率64.3%、平均枝肉重量71.2kg、DG(肥育開始～出荷)546.0g、農場飼料要求率3.17、種雌豚1頭当たり年間枝肉重量1,611kgと高位の技術成績を収めており、県内の養豚農家の中でもトップクラスである。

とくに平成16、17年については、母豚頭数が若干減ったにもかかわらず、出荷頭数、肉豚売上を向上させている。

項目	年 単 位	13年	14年	15年	16年	17年	平均
		種雌豚1腹当たり正常産子数	頭	10.6	10.7	10.8	11.6
種雌豚1腹当たり離乳頭数	頭	9.5	10.0	10.3	11.1	11.0	10.4
種雌豚1頭当たり年間分娩回数	回	2.28	2.07	2.48	2.38	2.31	2.30
育成率	%	90.9	91.0	95.8	94.0	95.1	93.4
種雌豚1頭当たり肉豚出荷頭数	頭	20.8	20.0	23.4	24.7	24.2	22.6
上物率	%	56.5	69.0	66.1	67.1	62.8	64.3
平均枝肉重量	kg	69.6	72.1	71.6	71.8	70.8	71.2
DG(肥育開始～出荷)	g	512.4	536.9	553.1	578.8	548.7	546.0
農場飼料要求率		3.24	3.06	3.27	3.09	3.17	3.17
種雌豚1頭当たり年間枝肉重量	kg	1,448	1,439	1,676	1,774	1,716	1,611

### (2) SPF豚飼育による有利販売

昭和56年(1981年)の養豚経営開始当初から、県下でもいち早くSPF豚を導入した。平

成3年に、愛媛県経済連（現、全農えひめ）とJAとともに銘柄化を行い、「内子風味豚」として量販店への有利販売を開始し、現在では新たに「新風味豚」というブランドを確立し、通常の相場に上乗せした価格で関西方面の量販店に出荷している（出荷頭数は全体の90%以上）。なお、「新風味豚」は肥育豚段階の飼料に「地養素<sup>注1</sup>」を添加して差別化を図っている。

また、年に1回、「新風味豚」を販売している関西圏のスーパーのフェアに地域養豚団地の農家が店頭に立ってPR活動を行っており、富永さんもその一端を担っている。

注1) 木酢精留液、ゼオライト、海藻、ヨモギ粉末が原料の添加物

### (3) 高度な飼養管理レベル

SPF豚飼育の付帯効果ともいえるが、部外者の農場内への立ち入りを禁止するとともに、施設へ入る前に必ず入浴を行っているほか、豚舎での徹底した衛生飼養管理を実施しており、肥育事故率も2.0%台を維持している。

なお、妊娠確認には常に妊娠鑑定器を使用して不受胎豚の早期発見と繁殖成績の向上に努めている。

また、肥育段階の飼料給与については従来からのドライフィーディングによる制限給餌を実践しており、自動給餌機に頼らず配餌車による手やりを貫くこだわりもある。現在は環境対応型飼料<sup>注2</sup>を給与しており、その効果として排せつされる尿の量が推定で2割程度減少している。

注2) 低窒素、マッシュ+エキスパンダーの混合飼料

### (4) 経営診断ソフトの活用により高所得を実現

県下でもいち早くパソコン利用の経営診断ソフト「トントンアップ」を導入し、自ら記録記帳と経営把握を実践している。さらに、各種研修会に積極的に参加するほか、関係支援機関とともに養豚団地の農家全体の定例経営検討会を実施している。この検討会では、お互いが刺激し競争しながら経営の向上および健全化を図っている。

これらの取り組みの結果、平成8年には借入金の償還が終了し、その後、種雌豚1頭当たり15万円を超える所得を確保している。

## 5 地域農業や地域社会との協調・融和のために取り組んでいる活動内容

### (1) 道の駅「内子フレッシュパークからり」への食材提供

「内子フレッシュパークからり」は、国道56号と国道379号が交差し、小田川と中山川の合流する地点に位置する道の駅で、産直施設、レストラン、各種加工施設、情報センターなど内子町のすべての魅力を集約した施設である。

富永さんと程内養豚団地のもう1人が出荷するSPF豚が定期的（現在は週に3頭ほど）に利用されている。地場産豚肉として精肉販売されるほか、オリジナルハム・ソーセージの原料、ロースかつ丼やひれかつ御膳等レストランの食材として利用され、人気を集めている。

とくにハム・ソーセージについては、ドイツの味をベースに内子らしさを追求した「か

「からりオリジナルハム・ソーセージ」が約 10 種類作られている。これに取り組むのは、これまでともに経営してきた山口氏の後継者であり、本場ドイツのローテンブルグ市での 3 年間の修行を経て、「からり」で製造主任として携わっている。その山口氏（後継者）が地場産豚肉かつ SPF 豚を用いて提供したいとの熱意もあり、ここで取り扱われるようになった。

このように程内養豚団地の仲間から生まれた地産地消の取り組みであるが、地元のレストランで食材として加工、料理されてお客さんの評価を身近に受けることが可能であることから、今後の生産活動に十分につながるパイプである。このように地域の消費産業とうまく連携することで、お互いの相乗効果を高めている。

### 「内子フレッシュパークからり」の概要

#### 「からり」の語源

果（フルーツ）を楽しむ“果楽里”、花を楽しむ“花楽里”、香り（ハーブ）楽しむ“香楽里”、そしてカラリと晴れた気分、カラリとさわやかな人間関係などのイメージで名付けられた

年間売上高 6 億円（平成 16 年度）

#### 施設の概要

特産品販売所：内子町内産のフルーツ・野菜・ハーブ・花、これらを使用したシャーベット・アイスクリームを販売

レストランからり：地元の食材と旬にこだわった地場産食材を利用したレストラン、富永さんら程内養豚団地の豚肉を使用

農村体験館・農業公園、ふれあい広場

情報センター：地域で生産された特産物の直売所、観光・文化・歴史・イベントなどの情報を提供

からりオリジナルハム・ソーセージ（燻製工房）：富永さんら程内養豚団地の豚肉と地元産ハーブを使用、程内養豚団地のメンバーであった山口氏の後継者が製造主任

パン工房

あぐり亭：農家女性組織「内子アグリベンチャー21」が運営する食堂、地元食材を利用  
体験教室・イベント：農作業体験や農産加工の体験教室を随時開催

### (2) 内子町のエコロジータウンを目指す取り組みの一端を担う

内子町では「環境に優しい栽培方法で生産した農産物」を認証する制度を設けている。富永さんら程内養豚団地では、家畜排せつ物を共同たい肥センター（名称：JA 愛媛たいき内子堆肥センター）に供給している。センターでは、食品残さとともにたい肥が生産され、耕種農家へ販売されている。この生産たい肥「エコパワー」を用いて栽培された作物が認証を受け、安全・安心な農作物として道の駅で販売されており、資源循環型農業が展開されている。

たい肥センターは当初、JA の運営であったが、現在は行政も巻き込んだ運営がなされており、地域の生ゴミも収集してたい肥化を行うなど、地域一体となった活動となっている。

### (3) 地域の水車小屋を復元

程内養豚団地のメンバーが中心となり、程内地域にある「御調の森水車小屋」を整備し観光スポットとして PR している。また、「御調の森水車祭り」を開催して都市住民との交流を図り、水車による米の精米やそばの製粉を行って付加価値商品の開発も目指している。

なお、この御調の森水車は、平成 12 年に内子町より町の美しい景観建造物デザイン賞を受賞した。

#### (4) 養豚団地として第 10 回愛媛農林水産賞優秀賞を受賞

平成 13 年 10 月、富永氏が代表を務める「JA 愛媛たいき程内養豚団地(当時 4 戸)」が「第 10 回愛媛農林水産賞」において優秀賞を受賞した。同催事は、県内の農林水産業の発展と振興に寄与し、模範となる団体・個人をたたえるもので、まさに地域農業発展のために、各農家が協調性を持って取り組んだ結果であるといえる。

同団地は、当初 5 戸の経営でスタートしたが、現在は 3 人で構成されている。さらに今秋に 1 戸が離農し、2 戸となる。

## 6 今後の目指す方向性と課題

### (1) 現状維持での安定的な生産

頭数規模は、現状の施設規模、労働力からみても現在の種雌豚 70 頭が最良である。富永さんは、現状でさらなる技術のレベルアップを図るとともに、より一層の品質向上に努め、美味しく、安心して食べられる豚肉を安定的に生産することを徹底することで、安定的な経営を維持していきたいと考えている。

### (2) 後継者が安心して継承できる経営環境づくり

将来的には、後継者に養豚経営を継いでほしいと考えており、そのために安心して取り組める経営環境づくりを進めていく予定である。

また、現在は肉豚の出荷のほとんどが県外出荷であり、町内の「からり」への出荷は一部であるが、「からり」における豚肉製品は非常に人気があることから、地元への出荷量を増やし、より多くの地元の人においしい豚肉を食べてもらいたいと考えている。

さらに内子町ではさまざまな果樹栽培が行われており、シーズンにもなると観光農園の看板が目を引く。このような地域の特色を活かして、地元産 100%の果物と自家産の豚肉やハム・ソーセージ等の加工品を販売する「観光くだもの園」をつくる夢も持っている。

【写真】



当初富永氏と山口氏の共同経営でスタート



豚舎全景



豚舎は 400m 級の山の頂上付近にある



分娩舎



肥育舎



斜面を利用した、たい肥舎



「からり」内で精肉加工品として販売



道の駅「内子フレッシュパークからり」